

---

# 転生者は召喚術士

イエデンワ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生者は召喚術士

### 【著者名】

イヒデンワ

N7902N

### 【あらすじ】

ネギま！の世界に転生した男は、召喚術を修めて楽に金を稼ぐことを「」の方針とした。ネギのいことして生まれた男は、はたして望み通りに生きることができるのか。

アンチはありません

## 1話（前書き）

毎日更新で書こうと思います。よろしくお願ひします。

働く、というのは現代社会人の義務らしい。日本では憲法に定められていたし、そもそもふつうは働かなければ生きていけない。

だが、待つてほしい。現代に入り、地球の人口は爆発的に増加している。発展途上国ではそうでもないが、先進国では職に就ける人間の数は年々減っている。つまり、余裕のある誰かが働かないことでほかの誰かを救うことができるのだと考えられないだろうか。

そもそも、働くというのは地球環境にやさしくない。肉体労働にせよ知的労働にせよ、エネルギーを消費して二酸化炭素の排出を促進する。地球環境を守りたいのなら、労働は最小限にすべきだ。

アリアードナー大学付属魔法学校。その入学試験の会場で、問題を解き終わって暇を持て余した僕はそんなことを考えていた。

試験問題はごくごく簡単で、ほぼ満点に近い点数が取れている自信がある。実技試験も僕の実力なら楽に突破できるだろうし、最高学府の付属学校とはいえ大したことはないかもしねれない。

署名欄に「デレク・スプリングフィールド・9歳」と書かれていることを確認し、あぐびをかみ殺した。

この世界に転生してから早くも9年が経つ。英雄の親戚ということもからウエルズの故郷では特別扱いされてきたが、それもこの学校に入学すれば終わりだ。四六時中あつたこともない叔父の話ばかりする連中とは縁が切れ、僕は自由に生きることができるのだ。

留学に当たつて村の面々が出してくれた金額はアリアドネー大の卒業までの学資には少し足りないかもしだれど、それはまあ自分で稼げばいいだろう。魔法使いというのは儲かるのだ。とくに、僕のような召喚術士は適当に命令を出すだけで仕事ができるのだからちゅういものである。まさに人生イージーモードというやつだ。

そんな僕の人生設計はずばり、四十歳まで働いてあとはリタイア。がつぽり稼いだお金で楽隱居。これである。魔法の研究は楽しいので、老後は魔法の開発でもしながら過ごそうかと考えている。

召喚術、という一見面倒くさそうでかつこよくな分野を専攻にしているのも、楽してお金を稼ぐためだ。召喚術士はどんなに距離が離れても召喚したものを使役できるし、要するに召喚したものを作成してしまえば乐して金が稼げる。召喚術士の間ではあまり好かれていない行為だが、いまは僕の大手な収入源だ。魔法の研究というのはまじめにやればやるほどお金がかかるため、お金はいくらあつても足りることはない。

故郷では天才だなんどもてはやされた僕だが、じつはそれほど大したことはない。確かに魔力量は並の魔法使いの数倍あるし前世の知識があるゆえのズルもできるが、もともとは一般人だ。戦場で人助けなど怖くてやりたくないし、召喚術以外の勉強はかなり適当だ。適当にやってても人並み以上にはできてしまうあたり英雄の親戚なのかもしれないが、要するにモビルスーツは強いけどパイロットは未熟な状態なのだ。

そんなことを考えていると、いつの間にか試験時間が終わつたようでチャイムが鳴り響いた。試験監督が解答用紙を回収し、解散が言い渡される。

試験会場を出て、宿泊しているホテルへと向かう。合格発表は一週間後なので、それまではアリアドネーに滞在するつもりなのだ。資金には余裕があるので、せいぜい観光を楽しもうと思う。

しかし、こうして魔法世界の都市を歩いているとここがファンタジーの世界だと実感させられる。亞人のたぐいにはもう慣れたが、やはりどこか違和感を覚えるのは僕が元日本人だからだろうか。魔法使いとしては一人前程度に習熟しているが、どうにも魔法世界にはなじめない。

ホテルの自室につくと、そこには先客が待っていた。

「スプリングフィールド様。依頼の品物、確かに回収してきました」

僕の部屋の隅にちょっと座っているのは、一週間前に僕が召喚した悪魔だ。悪魔とは言つても最下級の雑魚なので、駆け出しを卒業したばかりの僕でも自由に使役できる程度の靈格でしかない。

外見はさながら手乗り妖精のようだ、悪魔らしくないといえば悪魔らしくない。だが、だからこそ安心して使役できるのだ。悪魔だと看破されることはまずないだろうから、ちょっとしたお使いや採集にはうつつけなのである。

小妖精のような外見の悪魔が差し出したそれを受け取ると、僕は上機嫌にうなずいた。

「うん、ちょうどいいサイズだ。じゃあもう用はないから、今回は戻つていこよ」

僕がそう言つと、悪魔はぺこりと一礼して魔法陣を出現させ、姿を消した。

召喚術士が使役する悪魔は、そのほとんどが術者と「契約」を済ませた悪魔だ。「契約」というのは現代社会における雇用契約と同じで、術者が宝石や貴金属、あるいは魔力などを代価に悪魔を使役するという方式だ。さきほど悪魔には代価としていくばくかの金貨を貰えているため、ここ半年にわたって友好な関係が築けている。

さて。

僕がこれから始めるのは、中級悪魔の召喚だ。あわよくば契約を済ませて中級の悪魔を使役できるようになりたい、という願望から生まれた計画で、契約が成功すれば金も受けの手段はさらに増える。いままでは下級の悪魔を鉱山に送つて労働させていただけなのでそれほど金も受けの効率は良くなかったが、中級の悪魔を召喚できれば話は変わる。

なにせ、連中はそこそここの戦闘能力と「現世でやられても死にはしない」という性質を持っているのだ。戦場に送つて傭兵として働くかせればかなり儲かる。

召喚術のいいところは、使役するものが悪さをしても術士に迷惑がかからないというところだ。悪魔とかわす契約の中には、「なにがあつても雇い主のことを話さない」というのの一文があるし、都合がいいことこの上ない。

この世界の魔法使いの半数は、その力を正義のために役立てるべ

きだと考えている。当然世界平和の維持も魔法使いの仕事だとされている節があるようで、だから金で雇われて戦場で働く魔法使いは同法から厳しく排斥される。

しかし。召喚術士にとってそんなことは問題にならない。なぜなら、自分が戦場に行く必要がないのでいくら傭兵まがいのことをしようともばれるはずがないのだ。報酬の受け渡しに注意しておけばいいだけなので、ちよろいものである。

物思いにふけりながらも、故郷から持つてきた魔法のカバンを開いてレジヤーシートを取り出す。このレジヤーシートには召喚した悪魔を拘束するための魔法陣が描かれており、これにいくつかのルーン文字を書き足して魔力を注ぎ込めばいつでもどこでも召喚が可能になるという優れものである。故郷にいた召喚術士がくれたものだが、もともとは叔父であるナギ・スプリングフィールドが拾ってきたものらしい。とにかく性能がいいので重宝している。

ホテルの床にレジヤーシートを敷き、あらかじめ用意しておいた牛の血でルーン文字を書き足す。魔法陣とルーン文字に不備がないかどうかを三度チェックし、万全の態勢を確信した僕は琥珀のかけらを魔法陣の中央に置いた。召喚する悪魔をある程度選別するための仕掛けで、ルーン文字触媒、呪文の組み合わせによつて召喚される悪魔の性質や靈格が変わつてくるのだ。

今回召喚するのは、情報収集や隠密行動に適した中級悪魔だ。直接戦力になる戦闘特化型の悪魔も傭兵に向いているが、工作員向きの悪魔というのはもつとありがたがられる存在だ。絶対に口を割らない工作員など、人間には到底ありえない。死んでもリサイクルが

できるところでは、悪魔ほど工作員に向いた生き物はないかも  
しない。

時刻は正午を一時間ほど過ぎたころ。悪魔の力が最も弱まる正午  
からは巣く粗衣だけ時間が経っているが、まあ大丈夫だろう。  
始動キーを唱えるといったん口をつぐみ、それから呪文を唱え始  
める。

朗々と呪文を唱えていると、体から魔力が流れ出すのを感じる。  
予想外に魔力の消費が早いことに少しだけ焦るが、これくらいなら  
誤差の範囲内だ。気持ちを落ち着けながら詠唱を続け、徐々に輝き  
始めた魔法陣をじっと見据える。

「……満たされぬもの、わが呼びかけに答えて出でよ

呪文の最後の一説を口にすると、ひときわ大きな魔力が吸い取ら  
れ　　そして次の瞬間、魔法陣が強く発行して中から何者かが出現  
した。

「……お前か、俺を召喚したのは

粗野な口調にむつとするが、ここで腹を立てては相手の思うつぼ。  
召喚された悪魔は、口先三寸で自分を拘束する魔法陣から逃れよう  
とするものだ。言葉に耳を貸してはならない。

「契約だ」

悪魔の目を睨み付け、僕はそう言った。

召喚された悪魔は、悪魔にしては華奢な体格だった。身長は2m以上あるようだが、横幅はそれほどでもない。全身から放たれる威圧感は下級悪魔のものとは別格だが、相手は魔法陣に拘束される。なんら恐れることはない。

「やとわれの工作員として、地球の中東あたりで変装して活動してほしい。報酬は半分ずつで、休暇は応相談だ」

僕が一気にまくしたてると、悪魔は沈黙を保つまま考え込むそぶりを見せた。

どうも試されているようで気に入らないが、悪魔が口を開くのを待つ。どうせ、僕が根負けして条件をよくするのを待っているのだろう。その手には乗るものか。

5分ほど沈黙が続いた。

悪魔の顔を眺め続けるのも退屈なので、僕は悪魔に背を向けて召喚術の教本を取り出す。魔法陣は万全だ、悪魔が陣から出でてくることはない。

魔法でお湯を沸かして紅茶を入れ、教本を開く。内容が頭に入るわけはないが、こういうポーズをとることが重要なのだ。そのうち根負けして妥協するに違いない。

一杯目の紅茶を飲み終わり、一杯目を入れようとしたその時。ようやく悪魔は口を開いた。

「いいだろう。補足はあるか？」

悪魔との契約がうまくいきそうだと感じた僕は、にやりと笑って

から答えた。

「戦場に落ちてる銃とか爆弾とか、できるだけ回収して持ってきてくれるとありがたい。修理したり改造したりして売ると金になるとと思うんだ」

「そのくらいなら問題はない。では、契約を」

即答した悪魔は表情を変えない。もともとそういう気質の悪魔なのか、それとも僕を動搖させるための演技か。人間味がないことこの上ないが、考えてみればこいつは悪魔だ。人間味がないのは当然だろう。

「じゃあ、これにサインを」

そういうて、僕は契約書と羽ペンを取り出した。召喚術士向けに販売されているマジックアイテムで、術者と悪魔がそれぞれサインすることで契約が結ばれるというアイテムだ。

書面に目を通した悪魔がサインをすると、契約書は発行して僕の手元に戻った。僕はそれを魔法のカバンにしまいこみ、悪魔に向き直る。

「じゃ、いまから仕事してもうつていいかな?」

「了解した、術士殿」

悪魔は見た目に反して優雅な礼をすると、忽然と目の前から消え失せた。長距離移動系の魔法を使ったのだろう。どうやら、魔法の腕は僕よりずっと上らしい。

まあ、これでますます財布も潤うし、一ヶ月後からは楽しい学校生活の始まりだ。せいぜい授業にでも備えて勉強をしておこう。

そう考えた僕は、魔法陣や道具一式を片付けふたたび魔法の教本を開いたのだった。

アリアードネー大学付属魔法学校は、入学年齢も卒業年齢も決まっていない自由な学校だ。卒業に足るだけの実力がついたと教員に認めてもらえば卒業認定証がもらえる、そんな学校なのだ。つまり、本気を出して勉強すれば情人よりはるかに早く大学に入ることもできるということ。ここを卒業すれば魔法世界の最高学府と名高いアリードネー大学に無条件で入学できるのだから、モチベーションも上がるというものである。

入学式を終え、今日は時間割を組む日だ。ここでは各自が自分の好きな学科を選択して履修するという方式のため、時間割は自由に組んでいいことになっている。

僕が修めたいのは召喚術全般にマジックアイテムの作成、それから補助系の魔法だ。必修の授業というものは存在しないため、本当に学びたいものだけを学ぶことができる。何とも素晴らしいと思つ。

召喚術というのはいくつかある魔法の体系の中でもとくに魔力量に依存するところが大きい。なにせ、使役するものを現世にとどめるのには結構な量の魔力を消費するのだ。そのため、魔力量の多い僕は召喚術士への適性があるといえる。

いまのぼくの魔力量だと、中級の悪魔をもう一匹召喚すれば魔力は限界だらう。実生活で魔法を使うことを考えると、中級一匹と下級六匹という現状に満足するしかないようだ。もっとも、召喚時に使用する魔法陣やルーン文字の質を高めることで悪魔をとどめるのに必要な魔力は随分と減るという話だ。学校ではそうした技術を中心

に勉強を進めようかと考えている。

とりあえずは、魔法陣作成とローン文字実習、マジックアイテム作成と補助系魔法。そのあたりの授業をとれば問題はないだろう。

さらさらとペンを動かし、時間割を作る。いくつか興味深い授業もあつたが、僕は老後のために資金を蓄えなければいけないのだ。余計な授業料を納める気にはならないし、未練を感じながらも必要最低限の授業だけをとることにした。

が、必要最低限の授業だけをとつたつもりでも、結局は平均より多めの科目を受講することになったようだ。月曜日から土曜日まではほとんど隙間なく埋まってしまった。

理由は簡単だ。悪魔を使役するなら、悪魔の生態や社会について教える授業も取らなくてはならないのだ。それらの講座も取ることにしてしまった。

これでは、とてもではないが悪魔たちをフルに働かせていられる余裕はないだろう。下級悪魔たちについてははやいところ鉱山から引き揚げさせようと決心し、完成した時間割を受け付けに提出した僕はそのまま下校した。授業はあさつてからので、明日一日は余裕がある。さて、何をするべきか。

明日の予定を考えながら歩いていると、すぐにホテルについてしまつた。僕は学生寮に入るためこここのホテルからはそろそろ引き上げなければいけない。

自室の扉を開けると、そこには先日召喚した中級悪魔がいた。

「やあ、調子はどうだい」

声をかけると、彼は一矢うに札束を投げてよこした。百ドル札の札束。数えてみると、30あった。つまり、3000ドルの収入といふことか。

「今日は運が良かったが、次からはいつもつまらないことだ。銃器類はここに置いていく」

どうやら彼は報告のためだけに帰ってきたようで、それだけ言つと転移の魔法で消え失せてしまった。

彼が消えた後には、数丁の拳銃とでかいライフル、マシンガンらしきものが残っていた。どれもこれも薄汚れているが、少なくとも大きな破損はない。

アリアードナーにも銃器を扱う店はあつたはずだし、ローン文字で銃を加工するのも面白いだろう。さいわい、この街に到着した際に下級悪魔を使ってそういう店の場所は調べてある。僕は通販で買った年齢詐称薬を取り出し、一錠だけ口に放り込むと出かける準備を始めた。

僕の持つている魔法のカバンには、質量を無視して好きなだけ荷物をしまうことができる。これもまた亡き叔父の遺産だそうで、彼

の息子があまりにも幼すぎるという理由で僕に送られた。僕が物干しそうな顔をしていたのも原因ではあつたろうが、それにしてもあの村の住人は英雄の関係者に対して気前が良すぎる。

現在、あの村にいる英雄の関係者はネカネさんとネギだけだ。さぞかしちやほやされていることだろうが、あいにくとこれっぽっちもうらやましくはない。英雄という言葉にあこがれがないわけではないが、戦場で体を張つて人助けなど僕には到底無理な話なのだ。後方支援くらいなら考えないでもないが。

そんなことを考えながらホテルを出て、表通りにある魔法用具店に向かう。魔法世界の主な都市のほとんどに出店しての大手チーンで、僕が必要とするものもきっと手に入るだろ。魔法用具店に行つた後は裏通りの銃器の店に行き、カタログをもらつてくるつもりだ。

平日の昼間だからか、人通りは少ない。休日にもなればラッシュ時の東京駅並みに混雑する場所だが、どうやら今日は苦しい思いをせずにはすみそうだ。

魔法用具店に入ると、まずはその品ぞろえの多さにびっくりした。この店は5階建てだが、なんとそのすべてが魔法用具の売り場なのだ。日本の平均的なホームセンターの3倍ほどはありそうだ、と内心ため息をつく。

エレベーター近くの売り場案内を見てほしいものがどこにあるかを探す。今日買う予定の品は、金属に文字を掘り込むための道具と魔力のこもった特殊なインク、それと杖自作のハンドブックだ。いま使つている発動媒体は指輪型の品で、このタイプの発動媒体は本来魔法剣士が扱うものだ。僕は接近戦など絶対にごめんだし、杖夕

イフの発動媒体の方が性能が高いことが多いのだ。それに自作した杖は市販のものよりも自分にフィットするので、魔力の消費を抑えられるとか。マジックアイテム作成の授業も（金になりそうなので）取るし、そこで培つ技術を生かさない手はない。

Hレベーターで四階まで上がり、品物を探す。僕のほしいものはすべてこの階にあるようなので、いちいち移動する手間が省けた。インクは目立つところに置いてあつたので、とりあえず一番目に安い無難そうなものを選んだ。僕はローン文字に関しては駆け出しあいといとこりだし、あまり高価な素材を使って失敗するのはよくないだろ。高価な素材を扱うのは高い技術が身についてからでいい。

自作杖のハンドブックも見つけたが、しかし肝心の文字を掘り込む道具が見つからない。ネットで調べてくれば良かつたかと思いつつ売り場をうろついていると、店員さんが声をかけてきた。

「お客様。何をお探しでしょうか？」

「ああ、金属にローン文字を掘り込む道具がほしいんですが……」

眼鏡をかけた誠実そうな顔の男だった。

「それでしたら、『案内します』

どうぞこちらへ、と男は僕を先導する。

ついた先には「鉄筆コーナー」という標識がぶら下がっており、僕の中に築かれていた鉄筆のイメージがガラガラと崩れ落ちていった。鉄筆ってそういうもんじゃないだろ。

「ありがとうございます、助かりました」

店員に礼を言い、品物を物色する。

インクと違つて消耗品ではないので、最初から高価なものを買つても問題はないだろう。

売り場の中で一番高価なものを選び、かごに入れる。少々高すぎるととも思ったが、中級悪魔が持つてきた報酬がある。このくらいの買い物は余裕だろう。

レジに並んで会計を済ませ、購入した品物を魔法のカバンに入れて店を出た。財布はだいぶ軽くなつたが、それに見合つだけの買い物ができたと思っている。

悪魔というのは傭兵として扱いのもいいが、武器商人としても優秀だ。戦場で拾つた銃を回収して修理・加工して売れば結構なお金になるだろう。元手がほとんどかかるないスマジックアイテム作成の練習にもなるので、我ながら素晴らしい案だと思う。

表通りから路地裏へ抜け、地図を片手に銃器を取り扱う店を目指す。アリアドネーは比較的治安がいいため路地裏に不良がたむろしているようなこともなく、僕のようなチキンハートでも安心して通行できる。人目があるところを歩くに越したことはないが、僕は魔法使いであることを示すローブを着ている。わざわざ魔法使いにちよつかいを出す不良もいないだろう。

実をいうと、僕自身の戦闘能力はそこら辺の魔法使いに毛が生えた程度でしかない。悪魔をこの世界にどどめるために魔力を消費しているから、戦闘に費やせる魔力の量が情人とほとんど変わらないのだ。攻撃呪文もそれほど熱心に覚えたわけじゃないし、魔法の矢といくつかの捕縛術が使える程度だ。まあ、いざとなつたら下級悪

魔を数匹呼んで使えばいいのだ。何度も言うが、召喚術士というのは単独で戦つたら負け。他力本願の物量作戦が召喚術士の本懐なのだ。

契約した悪魔が回収してきた銃器類はほとんど損傷がなかつたようだ、店では弾薬とカタログ、手入れの道具だけを購入した。自身の護身用にも拳銃が欲しいから、手入れのやり方についてのパンフレットも分けてもらつた。

ホテルに帰着し、魔法のカバンを開けて中身を取り出す。鉄筆、インク、ローン文字の解説書、拳銃、工具。これだけあれば銃の改良には事足りる。

拳銃の取扱説明書をめぐりながら慎重に解体し、油をしみこませた布でよく手入れする。何とも言えない匂いが部屋に広がるが、こんなものは後で魔法でどうにかすればいい。

一通りの手入れを終えると、今度も説明書を見ながら慎重に組み立てた。銃というのは纖細だから注意して扱うように、と銃器店のオヤジが言つていたことを思い出す。魔法障壁があればただの銃が爆発した程度では大した怪我は負わないが、それでもこれは売り物なのだ。購入者から苦情が来ては困る。

組み立てが終わると、今度はルーン文字の解説書を開いてインク瓶のふたを開け、鉄筆の先端をインクに浸した。

今回刻むルーンは、銃本体の保存状態をよくするルーンだ。錆や細かい砂から内部の機構を守り、手入れの手間を省くためのルーンである。

銃器店のオヤジ曰く、銃の威力に関するような改造は銃の構造をよく理解できるようになつてからにしろとのこと。素人が内部構造の改造に手を出すと口クなことにならない、と言われた。専門家の言つことなら間違はないだろうから、習熟するまではその言いつけを守らうと思つ。

インクに浸していた鉄筆を握り、拳銃を作業台の上に乗せる。刻むルーンは暗記してあるので、教本を見なくても問題はない。

鉄筆は値段相応によく働く。何かの魔法がかかっているのか、グリップを切り裂き金属に溝を刻みこんでいる。事前に練習として紙にルーンを書きつけたりしていたが、ひょっとすれば紙に書くのと同じくらいの労力で金属にルーンが刻めてしまう。いい買い物をしたな、と悦に入りつつルーンを施し、ティッシュでこぼれたインクをふき取つて作業は終了した。

この銃は安物でそれほど良くないものらしいから、適当に売りさばいてしまおう。自分で使うものには万全の加工を施したいし、アリアドネーにいる間は戦闘に参加することはまずないだろう。どこに就職するかということはまだ考えていないが、就職は当分先だろう。とりあえず、いまは加工技術に磨きをかけなければいけない。

部屋の片づけが終わり、年齢差生薬の効果も切れた。ぶかぶかに

なつた服を着替えながら、僕はこれから的人生設計について考えを巡らしていたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7902z/>

---

転生者は召喚術士

2011年12月25日14時52分発行